

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「トメ、むだめしを食わせておくわけには、いかんぞ」

かしらが、ぶしようひげにめいつぶをつけたまま、大またに近づいてきて横にどつかとすわる。

「さっさと黒谷へ帰れ」

トメが、おはしをおいて両手をついた。

「おねがいます。ここへ置いてください」

「つえをつきながら、運び人ができると思うのか」

トメの折れた足首にはそえ木をあて、うごかさないようにしているが、ちゃんと歩けるようになるまでには、ひと月もふた月もかかるらしい。それまでは、つえを使うしかない。

「かしら、後生です。まかないでも、なんでもしますから、追いださんといってください」

ぶしようひげは、首をこきこきと鳴らしながら顔を横にふった。

「まかないは間にあつとる。足らんの運び人だけや」

「けど……おいら、この足では黒谷へもどれまへん」

「わしの知ったことか！」

かしらは、ふところから小さな布ぶくろをとりだすと、投げるように置いた。

「ほれ、きょうまでの給金、十日分や」

あごのぶしようひげをぞろつとで、ついていためいつぶをつまんで、口の中へほうりこむ。

「帰りの駕籠賃ぐらいにはなるやろ。そのぶん浮かそうと思うたら、つえをついて歩いて帰ることや。まあ、ひとりでは無理やろけどな」

そのとたん矢吉の口から、自分でもびっくりするような言葉がとびだした。

「おれが、黒谷までおくっていきます」

いま黒谷へ帰っても、おふくろや谷の人たちに合わす顔がない。分かっているはずなのに、口が勝手にうごく。

「駕籠をたのまんでも、おれが連れて帰ります」

これなら、嫌気虫に負けてにげだすのではない。トメのために、ここを出ていくのだ。胸をはって山をおりられる。かしらの大きな目が、ぎろつとうごいた。

「矢吉。えらい、やさしいことを言うやないか」

①「あつ、いや……おなじ黒谷のもんとして、ほっておけへんし……」
かしらが、ふふんと鼻先でわらった。

「ちかごろ、おまえの仕事ぶりが落ちてきたと思うたが、そろそろ運び人が嫌になったんやろ。トメを送って行って、そのまま帰って来んつもりやな」

ぎくつとした。顔色が変わるのが自分でも分かった。

「い、いえ……」

「たしかに運び人は、つらい仕事や。けどな、山の上から重たい砥石のかたまりをかつぎおろす者がおらんかったら、世の中の刃物は、みんななまくらになってしまふんやで」

また、お得意のせりふが始まった。

「大工が、カンナもノミも研げへんようになったら、家を建てることができんし、魚屋が包丁を研げへんようになったら、タコの足を切ることもできひん」

それぐらい、言われなくても分かっている。

「ええか矢吉、砥石山の運び人は、世の中を底から支えとるんや。ここで、てんびん棒の重さに耐えて一年しんぼうしたら、どこへ行っても、一人前の仕事ができる男になれる。あと十月でええ。もうひとふんばりせんで、どうする」

「へ、へえ……けど、トメを送って行ってやらなあきまへんし……」

「それは、ここをにげだす口実やろ！」

背中を冷たい汗がツーツとすべった。

「矢吉。ふた月前にここへ来たとき、わしとあれほど約束した言葉を、もうわすれたんか！」

わすれてはいない。この砥石山へ登ってきて、かしらに、働かせてもらえるように頭をさげたとき、「石にかじりついて、一人前の男になります」と答えた。自分でも、固く心にそう決めていた。だが、いくら心に決めても、そのとおりにできないのだ。それが、自分のダメなところだと分かっている。分かっている、どうしようもないのだ。

「け、けど……おれには運び人は、むいてへんような……」

「このなまくらめ！」

かしらの平手打ちが、矢吉のほおにパシッと飛んできた。

「もうええ。おまえみたいななまくらは、ここにはいらん。二度と帰って来るな」
去っていく大きな背中を、矢吉は、くちびるをかねで見おくった。

黒谷まで、あと一里(約四キロ)ほどのところで、冬のうすい夕焼けが道をてらし始めた。たまにすれちがう人も、いそぎ足になっている。

京北にある砥石山からは、ふつうに歩けば半日あまりで帰れる。だが、つえをつきながらでは、なかなか道がはかどらない。夜あけ前に出たのに、もう夕暮れがせまってきた。

「しょうがねえな」

矢吉は、しゃがんでトメに背中をむけた。

「えっ、また、おんぶしてくれるの？」

「赤んぼうみたいな言い方をするな。早くしろ」

背負うのは、あるき始めてからこれで三度目。ゆすりあげると本当に軽い。こんな体で、よくも運び人をやろうとしたものだ。「しゃべりのトメ」なのに、砥石山を出たときから口数が少ない。

矢吉は、トメのとがった腰の骨を背中で感じながら、山あいの道をいそいだ。

黒谷まで、もうひといきのところまで来たとき、背中でトメの声がした。

②「おいら……帰ろうない」

「おまえ、うそをついて家を出てきたんやろ」

背中、小さなあごがこくつと動いた。砥石山は、おやじさんのかたきみたいな場所だ。だからトメは、家の者に、砥石山へ行くとは言えなかったはずだ。京都で人足（注2）をしてくるとも言いおいて、出てきたにちがいない。

「おまえみたいな小つこい体で、運び人ができるわけないやろ。このドあほ！」

「矢吉兄いこそ、なんで砥石山にいたん？ 京都の左官屋（注3）さんにいるって思うてたのに」

いやなことをいうやつだ。

「まあ……いろいろあったんや」

「いまに一人前の左官屋になって、ふるさとへ錦（注1）をかざってくれるはずやて、黒谷のみんながうわさしとったよ」

「そないに簡単に一人前になれたら、苦勞はせん」

「一人前になるために、みんな苦勞するんやろ」

カチンときた。

「矢吉兄はすぐ手が出るし、左官屋さんでケンカでもしたんちがう？」

「ケンカなんかしてへん」

「ほな、左官屋がきらいなんか？ おいらやったら、一人前の左官屋になるためなら、どんな苦勞でも、しんぼうするで……」

「おまえ、ここからひとり歩いて帰れ！」

ほうり投げてやろうかと思つたが、まっすぐズルツと地面におとした。

「いてっ」

と、しりもちをついて顔をしかめたけど、知らん顔をして背中をむけた。

「矢吉兄い、待つて！ どこへ行くん？」

どこへ行くあてもない。帰りたくても、十二のトメまで働きに出ている黒谷へ帰るわけにはいかない。京都へまいもどつて、人足仕事でもさがすしかないだろう。

「おまえの知つたことか」

「知つたことや！ どこへ行くか教えてくれへんかったら、黒谷のみんなに、矢吉さんは、京都の左官屋さんを逃げだして砥石

山で運び人をしてたけど、またすぐ逃げだして、どこかへ行つてしまつたつて言うで」

「なに！」

ふりむいたら、トメがつえにすがつて立ち上がろうとしていた。

走り寄つて、そのつえを思いきりけとばしてやつた。どつとたおれたトメが、足をかかえて地面をころげまわる。

「う……ううっ……」

いつまでもころげまわっているの、ちよつと気になり、声をかけた。

「だ、だいじょうぶか？」

だが、返事もせずに、右に左にころげまわっている。

「トメ、しっかりせえ」

うでをつかんで引き起こしたけど、すぐにグニャツとたおれそうになる。

「ああ……おいら……もうあかん」

「あほたれ。しゃんとせんかい！」

しかたなく、もう一度、せおいあげた。

「ちえっ、このなまくらめが！」

すると、今までうなつていたのがうそみたいに、背中から、はしゃいだ声がした。

「へっへっへ、おいらも、矢吉兄いとおんなじなまくらになつてしまつた」

「このお！」

また、ほうり投げたくなつたけど、がまんして送つてやることにした。やはりトメは、ひとりで帰るのが心細いのだろう。お金をかせいでくると勇んで谷を出たのに、わずか十日でもどるのは、つらい。しかも、ケガまでしているのだ。

③ もうすぐ日が落ちて暗くなるから、このまま黒谷まで送つていつても、だれにも見られずにすむかもしれない。本当は、一年ぶりにおふくろの顔をみたいけど……。

「矢吉兄い。あのかしらは、意外とええ人みたいやで。給金をよぶんにくれたんや」

「えっ、あの錢勘定（注4）にうるさいやつが？」

「ふくろの中味を見たら、ぎょうさんあったし、けさ出がけにそっと聞いてみたんや。そしたら、『くすり代や、とつとけ』って……」

「ふん、ぶしようひげめが」
あいつめ、トメのおやじさんに対する、前のかしらの冷たい仕打ちを気にしていたのかもしれない。まだ十二歳で、体も小さいトメを運び人にやとつてくれたのも、そのためだろう。

あたりが薄墨色に変わってきた。もう、すれちがう人もいない。
矢吉は、ずり落ちそうなトメをゆすりあげながら、足を早めた。
やがて、闇のむこうから、かすかな音が聞こえ始めた。

トーン トーン

すんだ冬の空気をふるわすように、同じ調子でひびいてくる。

「一年ぶりや……」

それは、黒谷の冬の夜なべにくりかえされる音。あすの紙すきのために、コウゾの白皮を棒でたたいてやわらかくする紙たたきの音だ。

矢吉も、よくたたかされた。

木灰をいれて煮たコウゾの白皮を、手が切れるほど冷たい川水につけてアクをぬき、ていねいにチリをとりのぞいて台の上にひろげる。それを長い棒で、ねむい目をこすりながらたたくのだ。

いつも、しんぼうできずに、いねむりをしては、おふくろに、「ほれ矢吉。もうひとふんばりしような」とゆりおこされた。小さな土橋をわたると、谷の真ん中をチロチロとながれる黒谷川が白く見えてきた。

この川へ真冬に素足で入り、コウゾの皮をもんでいたおふくろの、真っ赤になった足首が目にかぶ。

川の両がわの斜面には、へばりつくように、かやぶき屋根の家が建っている。わずかに十数戸の家にとる灯りは、どれも暗い。

トーン トーン

あちこちの家から紙たたきの音がひびいてくる。

しびれるようなふるさとのにおいが、矢吉の体をほわりとつつんだ。

「トメ……おまえも紙すきをしたら、どうや」

「あれは女の仕事やもん」

たしかに黒谷の男は、山仕事をするか、谷の外へ出かせぎにいき、紙すきをするのは女たちだ。

「けど、おまえには人足は向いてへん。紙すきをして、もっと京都へ売りこんだらどうや」

「売りこんでも、買ってもらえへんかったら、あかんやろ」

「おれが京都の左官屋におったとき、親方につれられて呉服屋の土蔵直しにいったら、『黒谷の紙は丈夫で強いから使い勝手がええ』って言うてたぞ」

「このごろは、着物をつつむ畳紙づくりに力を入れ始めてるんや」

「紙すきしてるほうが、おまえに似合ってるのどちがうか」

「矢吉兄いが谷に残って紙すきするんやったら、おいらも残る」

「ドあほ！ おれには人足が向いとるんや」

トメの家の下まで来たとき、

「……おりる」

トメが、自分から地面へすべりおりて片足で立った。

「ひとりで、この坂を登れるか」

つえをついたトメは、つばをのみこんで、こくつとうなずいた。

「自分で登る」

家族には、背負われて帰るすがたをみせたくないのだろう。せめて最後は、自分の足で帰りたいにちがいない。

「じゃあ、気をつけて行け。おれと砥石山で会ったことは、だれにも言うなよ」

「えっ、矢吉兄いは、いっしょに帰らへんの？」

「どのつらさげて、みんなに会えるんや」

「ちよつとだけでも顔をみせてあげたら、おふくろさんが大喜びするで」

どうやらトメは、そのために、なんだかんだ言いながら、矢吉をここまで引っぱって来たらしい。

「なあ、砥石山で会ったとは言わへんし、ちよつとだけ寄っていけばええやん」
きのう給金をもらったばかりだ。これまで、ためたぶんもあわせれば、土産がわりにおふくろにいくらか渡せる。ほんまにちよつとだけ顔を見に……。

いや、だめだ。左官屋をたびだしたことを知ったら、おふくろがどれだけ悲しむか……。待てよ。まだ左官屋にいることにして、休みをもらって帰ったことにすれば……。

だが、おふくろにうそはつけない。小さいころから、うそをついては、すぐに見ぬかれて、しかられた。

矢吉はふところから銭の入った巾着袋をとりだした。百文銭を五枚だけぬいて自分のふところへしまい、のこりを袋ごとトメの手に乗せた。

「おふくろに渡しといてくれ」

「いやや。自分で渡してあげなよ」

「うるさい！ さっさと行け」

手にぐいとおしつけると、トメが、半べそをかいたような顔でうなずいた。

「ほな……この銭は、矢吉兄いに京都であずかったことにしとくわ。そしたら、おいらも京都で人足しててケガしたつて言えるもん」

「ええか、もう二度と人足をしようなんて思うな。おまえは、ここで紙すきをしろ」

小さくうなずいたトメは、つえにすがりながら、ジグザグの坂道をゆっくり登り始めた。トメの家は坂道の下の方にあるから、ひとりでも、なんとかたどりつけるだろう。

矢吉は、そこに立ったまま坂の上をみあげた。

トメの家から少し登ると、矢吉の家がある。ポツとうすい灯りがとまり、トーン、トーンという音が、えんりよがちに聞こえてくる。

おふくろが、たったひとりで白皮をたたいているのだ。あすは、また朝早くから、冷たい水を張ったすき舟の中で、手を真っ赤にしながら紙をすくのだろう。

坂道をのぼっていたトメの小さな影が、自分の家の戸口に立った。だが、すぐに戸をあけようとはしない。

たった十日で、ケガをしてもどってきたのだ。やっぱり、入りにくいらしい。そのまま、じっと立ちつくしている。いつまでたっても、戸に手をかけないばかりか、にげだすようなそぶりさえ見える。

「何をしとるんや。さっさと中へ入らんかい。④ おまえは、どこへも逃げられへんのやで」
つぶやいたその言葉が、矢吉自身の胸をグサリと突きさした。

——おれは、砥石山をにげてきたんや……。

すると、砥石山のかしらの顔がうかんできた。矢吉を「なまくらめ！」とどなった、あのぶしようひげの顔が……。

たしかに、いまの矢吉はなまくらだ。だけど、このままでいいとは思っていない。いつかは一人前になりたい。いや、きっと、なつてみせる。

矢吉は、戸口で立ちすくんでいるトメに、大声でさげんだ。

「トメー、ええやないか。砥石山でケガをしたつて言えよ。おやじと同じことになつてしもうたつて言えよ！」

とたんに、紙たたきの音が消え、谷はシーンと静まりかえった。

「そのかぼそい体で、家のために働こうとしたんやないか。一生懸命かせごうとしたんやないか。はずかしいことなんかあらへん。胸をはつて帰れ！」

トメの小さな影が、こちらをむくのが分かった。

「矢吉兄い……おおきに」

「おれのおふくろに言うといてくれ。矢吉は、左官屋はにげだしたけど、砥石山で、一人前になるための修業をしているつてな」
矢吉の家の戸がゴトゴトとあき、人影がのぞいた。暗くて、その顔は定かに分からなかった。

だが、矢吉の目には、ちゃんと見えていた。ほつれた髪をかきあげる、あかぎれで痛そうな手が……。手だけではない。

こけたほおも、うすいくちびるも、つつみこむようなやさしい目も、はっきりと見えていた。

——おふくろ……待っててくれ。

矢吉は、くるりときびすを返し、黒谷をあとにした。

(注1) 運び人……刃物を研ぐ原料となる石を山から切り出して、ふもとにかつぎ下ろす人。

(注2) 人足……力仕事をする肉体労働者。

(注3) 左官屋……かべをぬる職人。

問一——線部①「かしらが、ふふんと鼻先でわらった」のはなぜですか。その理由を具体的に説明しなさい。

問二——線部②「おいら……帰りとうない」とありますが、トメが「帰りとうない」理由のひとつに、うそをついて家を出てきたことがあげられます。このほかに矢吉はその理由をどのように考えていますか。四十字以内で説明しなさい。

問三——線部③「もうすぐ日が、顔をみたいけど……」とありますが、矢吉がこのような黒谷に帰るのをためらっているのはなぜですか。その理由を具体的に説明しなさい。

問四——線部④「おまえは、どこへも逃げられへんのやで」について。

- (1) このことばをきっかけに、矢吉はどのようなことに気づきましたか、答えなさい。
- (2) この後矢吉の気持ちは、それまでと比べてどのように変化しましたか、説明しなさい。

問五 この文章全体で、矢吉はかしらをどのような人物としてとらえていますか、百字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

街中を歩いていると様々な音に出会うので、音好きの私にとっては、時間があると足のむくまま歩いてしまう。一駅や二駅ぐらいはよく歩くが、いつの間にか迷子になって、またもとのフリダシ地点にもどっていたりして、意外と方向おんちの自分に気づいたりする。ふだん通ったことのない歩道橋や商店街、ガード下、地下道など、なぜか騒音の多いところを中心に、公園や住宅街、古い家屋の建ち並ぶ路地裏など、比較的静かなところをうまく取りまぜて歩くことが多いのだが、日によっては自動車が激しく行きかう道路を、ひたすら歩いてみたくなることもある。

タウン・リスニングの魅力は、同じ道を歩いても天候や時間帯によって様子が変化したり、意外性にとむハプニングに出会ったりするところにある。自転車がかけぬけていたり、工事現場のトラックが四つ角を曲がりきれなかったり、魚屋のお兄さんの威勢のいい売り声が耳にとびこんできたりする。また、集合住宅の高層階のあちこちから、風鈴の音が聞こえてきたりして、街のなかで出会う音は、それぞれに生き生きした表情を感じさせてくれる。

こういった街のノイズは一般に騒音と呼ばれるものだが、通りすがりのやじ馬にとっては①テレビ・ドラマの一場面に入りこんだようで、ふだん生活のなかで無視していた音が改めて新鮮なひびきとなって耳にとびこんできたりする。

【中略】

ところで、都市が抱えている音の風景は、都市を支えている表情として眺めてみると、騒音にも様々な表情が隠されていることがわかる。都市の活気と正比例するように、騒音の色あいも複雑化し、ホワイト・ノイズ化している。ビルの谷間に自動車の走行音が反射して、「ゴッゴッゴッ」と、まるで波が打ちよせるような音にも思えてくる。ときにはこの音が潮騒のように聞こえることもあるけれど、他方、排気ガスで空気が汚れてしまっているのだなと思うと、複雑な気持ちにさせられる。

電車や自動車のなかは結構やかましい。それにもかかわらず、眠気にさそわれたりする。うるさくてもゆらぎのある安定した

音は、安心できる音である。胎内音に似ているからかもしれない。また、ある音環境に意外な音が入りこむとバランスが崩れて、活気を帯びたり、逆にうるさを強調したりする。その一方で音がまったくくなく、妙にさみしくなると、見もしないテレビをつけっぱなしにしていることがよくある。

都会の公園のなかを歩いてみると、野鳥が意外と多く集まっているので、深山の気分が味わえたりする。梢をわたる風の音、小川のせせらぎなど、自然の鼓動がじかに伝わってくるのが心地よい。しかし、この安定した風景を断ち切るかのようにカラスの大量が飛来してくると、音の風景が一変する。いわば緊張した沈黙が支配するともいおうか、荒涼とした音の風景に変わっていったりする。

そうした例はたくさんあるが、とにかく安定した音の風景のなかに意外性が加わることによって、場の緊張感を高めたり(選挙カーや暴走族)、場の緊張感をやわらげたり(もの売りの声やストリート・パフォーマンス……)することに注目したい。かくて街のなかの音はノイズとして垂れ流されているようにみえるが、一方では情報としての音として連鎖していることがわかってくる。

日本人は古くから自然の音には敏感で、自然の音と同化しながら音の文化を築きあげてきた歴史がある。とくに文学や詩歌、俳句の世界では、季節感を表わす聴覚的イメージを触発してくるものが多く見出される。

③ 自然を愛する心と、繊細な音へのこだわりは、一見うるさいと思われる蟬の声にもはかなさを感じたりするところにあられるように、日本人の感性ないしは、耳の文化を如実に示している。西洋の人たちが一般にうるさいと感じる虫や蟬の声へのこうした愛着は、今日の都市の音風景におきかえてみても当てはまるだろう。うるさいと思われる音に対してもことのほか寛容であったりする。

たとえば、商店街の大売り出しのときに大声で発せられるメッセージ、街頭で自分の名を連呼する選挙カー、駅のアナウンス、デパートの入口で勧誘するカード売り、テナント・ビルのそれぞれの店からフルボリュームで流されるBGM……。どれもこれもお客様へのサービスとして行なっているという大義名分があるからであろうか、元気サウンドを発することによって購買力をたかめていこうとする意図がうかがわれる。これは、古典的ともいえる市のにぎわいをそのまま再現しているようにも見え

るけれど、客とのコミュニケーションのうえでなりたつものではなく、きわめて一方的なインフォメーションとして流されているのが現実だ。

新しいテナント・ビルや商空間ができると、はじめのうちは音の環境も考慮されるのだが、しばらくすると、音の洪水を発するようになる。どうしてそうなるのだろうか。ここにノイズに対する私たちの感覚、あるいは感受性といったものが隠されているのかもしれない。

小鳥のさえずり、小川のせせらぎ、風の音などに心ひかれて享受する感覚が、いつのまにか都市化されたコンクリートの空間でも、まわりから聞こえてくるノイズに対して寛容な態度をとらせているのではなからうか。商空間のサービス・ノイズに対しても、サービスされているといった生活者の受けとめ方が見えかくれしている。それでいてアンケートによる意識調査では、駅やデパートのアナウンスは過剰だと多くの人が答えている。この落差はいったい何なのであろうか。私たちの心のなかで眠っている、もう一つの耳があるような気がしてならない。

西洋と比較すると日本やアジアは、自然と対峙するよりは、自然と同化していく、あるいはおりあいをつけていく文化を築いてきた。自然のざわめきも、人々のざわめきも、たんに音というより、音楽として楽しんで聞いているようなところがあるかもしれない。あるいは、音そのものを楽しんでしまおうとする文化ともいえる。

(吉村弘『街のなかで見つけた音』)

(注1) ホワイト・ノイズ……ラジオやテレビで受信していないときに聞こえるザーという音。

(注2) 聴覚的イメージ・ノイズを触発してくるもの……耳から聞こえる音に対する想像力をよびおこすもの。

(注3) 如実に……ありのままに。

(注4) 大義名分……だれに対しても、堂々と説明できる理由。

(注5) 享受……受け入れ、味わい楽しむこと。

(注6) 対峙する……対立する。

問一

——線部①「テレビ・ドラマの一場面に入りこんだようで」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 街歩きをすることでテレビを通じてしか聞けなかった音を実際に耳にし、それらの音の豊かさに改めて気づき感動しているということ。
- イ 街歩きをしていると意外性にとむハプニングが次々と起こり、自分がドラマの主人公になったような気持ちがしてわくわくしているということ。
- ウ 街歩きをしながら今まで何気なく耳にしていた音にも生き生きした表情があることに気づき、新たな発見を楽しんでいるということ。
- エ 何度も街歩きをしていくうちにその土地となじみ深くなり、やさしい気持ちで街の風景や音を感じ取れるようになっていくということ。

問二

——線部②「荒涼とした音の風景に変わっていったりする」とありますが、音の風景がどのようなものからどのようなものになったのですか。変化の原因もふくめて説明しなさい。

問三

——線部③「自然を愛するく寛容であったりする」について。

- (1) 「うるさいと思われる音」を現代の私たちが受け入れているのはなぜですか。「うるさいと思われる音」を文中のことばで言いかえつつ、説明しなさい。
- (2) 日本人の自然の音に対する感覚が「うるさいと思われる音」にも寛容な態度をとらせている、という筆者の考え方にについて、あなたは賛成ですか、反対ですか。根拠を明らかにして百〜百二十字で述べなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) セイコウ雨読の日々を楽しむ。
- (2) 彼は、弟のまちがいをインショウに付した。
- (3) 祖父は病気になったが、「二病ソクサイ」と言って前向きにがんばっている。
- (4) 機先をセイする。
- (5) この箱はヒョウジュン的な大きさである。